

地域の多様な人や機能とつながり、 共に歩む「子ども中心の街づくり」の進め方

柿沼平太郎（かきぬま・へいたろう）

学校法人柿沼学園 認定こども園 こどもむら 理事長

埼玉県久喜市に企業主導型保育事業の他、幼保連携型認定こども園、小規模保育事業、学童保育等を運営。カフェや駄菓子屋等と一体化した複合施設により、子ども子育て中心の街づくりを目指す。



認定こども園こどもむらは、1975年、埼玉県北東部にある旧栗橋町（現久喜市）に、私立栗橋さくら幼稚園として設立されました。その後、1987年から園のある旧栗橋町周辺の区画整理や町づくりが始まりました。

旧栗橋町は2010年に久喜市に合併されましたが、市としては人口減少が続いているものの、こどもむらのある伊坂地区の子どもの人口は増え続けています。

一般的に地方では1号認定の子どもや0才児の子どもが減っているという話を聞き

ますが、現在、私たちが運営している保育施設では入園希望者が定員を上回る状況がいまのところ続いています。

因果関係を簡単に結論付けることは難しいですが、これには私たちがこれまでおこなってきた、地域の子育て支援の取り組みが、わずかでもプラスに影響している可能性はあると考えています。地域連携に力を入れ、地域のために頑張っていれば、園も地域から必要とされる場所であり続けるのではないかと思えます。

時代とともに変化する保育施設の役割

長く保育施設を運営していると、自分たちの施設を中心として地域があるような錯覚を起こしてしまうことがあります。しかし、もともと地域があり、子どもがいて、子どもがいるからこそ、保育や子育て支援が必要になるわけです。社会構造が大きく変化し、地域の在り方も大きく変わっている現在、保育施設の社会的役割も、地域とともに変化しなくてはなりません。

保育施設の役割の変化や、地域との連携の必要性は、2012年に成立した「子ども・子育て関連3法」や、「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」にも書かれています。

いまは自分の園の子どもが、園にいる間、豊かに育つことを考えるだけでは足りません。卒園した子どもたちが小学校で、いじめにあつたり不登校になつたりすることもあるでしょう。虐待にあつている可能性もあります。また、地域全体には園に来ていない子どももいます。子どもたちが生活する環境が豊かにならない限り、結果として地域の未来環境はよくなりません。ただ、園だけではできることは限られているため、地域と一緒に取り組むことが必要です。

園が地域と連携する目的と、園が地域に与えられるもの

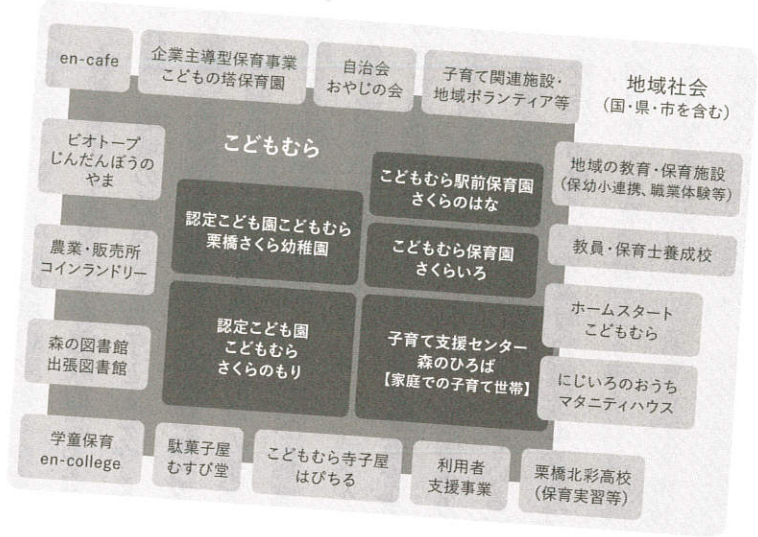
「では、どうやって変えていけばいいのか」「どのように地域と連携すればいいのか」に関してですが、まずは地域と連携する目的を見つめ直すことが大切です。たとえば、

医療機関や保健センター、地域の学校とつながっておくと、園に来る前から卒園した後まで、自然と子どもの育ちが連続的につながります。また、日常的に顔が見える関係であれば、地域のあちこちに子どもを守る目ができます。自治体や地域の人たちと仲良くしていれば、子どもの安心安全につながります。

次に、自園のもつ社会資源や、地域の資源を認識することです。園がもつ資源で、何か地域のために使えるものはないか、地域に貢献できるものはないかを考えてみるところがスタートになります。

その後に連携の仕方や、資源の使い方を考えていきます。子どもを中心とし、双方にメリットがあるやり方を考える必要があります。そして、とにかくやってみる事です。「うまくいくだろうか」と考えているばかりでは先に進みません。とりあえずやってみて、うまくいかなければそれからまた考える。試行錯誤は必須です。

こどもむら全体像



保護者や地域と共に歩む、
「子ども・子育てで中心の街づくり」

ここで、私たちがどのような地域連携の取り組みをしているかをご紹介します。私たちが描いている、こどもむらの全体像は、この図のようになっています。

目指しているのは、「子ども・子育てで中心の街づくり」です。地域で暮らすすべての子どもたちの健やかな育ちと、親の子育てを支える施設や社会を作ることが目標にしていま

す。

「認定こども園こどもむら栗橋さくら幼稚園」と、「認定こども園こどもむらさくらのもり」という2つのこども園、「さくらはな」、「さくらいろ」という2つの小規模保育園のほか、さまざまな施設があり、多様な取り組みをおこなっています。

子育て支援センターと、自治体と協力したアウトリーチ型子育て支援

子育て支援センター「森のひろば」は、登録すれば毎日自由に行くことができる居場所です。ここには「森の図書館」もあって、絵本や児童書だけでなく、女性誌や料理などの趣味の本も置いており、保護者や地域の方のための図書館の役割を果たしています。

「森の図書館」では、出張図書館もおこなっています。これは本を30冊ほど医療機関の待合室などにお届けし、年4回程度交換するというものです。かかりつけの病院の待合室にある本は、種類が頻繁に変わるわけではありませんから、飽きてしまいま

す。

そうすると、保護者の方は、スマートフォンに頼ってしまうこともあります。いまの時代仕方がないことだと思いますが、お膝に子どもを抱っこして本の読み聞かせができれば、子どもは五感で愛情を感じてもっと安心できます。またこうした出張図書館をきっかけに地元の医療機関と関係性が構築できて、日頃からのコミュニケーションもしやすくなり、園の子どもものちよつとした体調の相談もできるようになりました。「森のひろば」でおこなう子育て支援プログラムは、園の資源を利用するだけでなく、地域の方を巻き込むようにしています。園の栄養士が離乳食教室をおこなったり、地域のケーキ屋さんに来ていただき、クリスマスケーキ作りをおこなったりしました。また、地域には様々な家庭があります。経済的に厳しく、子どもの誕生日のお祝いできない家庭もあります。そこで、「森のひろば」では、お誕生日会もおこなって持ってほしいと考えてはじめた取り組みです。今はコロナ禍のため、持ち帰り用のデコレーションをしたゼリーを渡していますが、以前は大きな誕生日ケーキでお祝いを

していました。

「ホームスタートこどもむら」は、久喜市のバックアップを受けたアウトリーチ型子育て支援です。子育て支援センターに来ることができない家庭こそ、支援が必要なのではないかと、いうことで始めたボランティア活動です。

週1回、8回にわたってご家庭を訪問し、子育て支援をおこなうもので、育児相談に乗ったり、保護者の家事サポートなどもおこなっています。市の子育て支援課や保健センター、社会福祉士、保育・子育て支援関係有識者など専門家の方々のサポートも受けており、虐待につながりそうなケースは、行政につないでいます。

子育て支援を知ってもらうための産前・産後ケア

子どもを出産し、本当に支援が必要な時というのは、子どもの世話に手一杯で、地域にどんな子育て支援があるのかを探すのも大変な時です。また、利用したことがない施設に赤ちゃんを連れていくことには不安を伴います。子育て支援センターやホー

ムスタートを利用する時期よりもっと前、妊婦さんが産前の動けるうちに、地域に「こんな子育て支援があるのだ」と知ってもらおうという意味を込めて、妊婦さんたちの居場所事業も始めました。

2020年9月に開設した「にじいろのおうち」では、産前ケア事業「マタニティハウス」、産後ケア事業「ベビールーム」をおこなっています。沐浴の練習や離乳食講習、助産師さんの相談会などをおこなっています。沐浴の練習や離乳食講習

開始から1年余りですが、既に多くの方が利用してくれていて、生まれた赤ちゃんを見せに来てくれたりもしています。

卒園した子どもたちのための駄菓子屋と宿題カフェ

また、駄菓子屋「むすび堂」も運営しています。これは、卒園した子どもたちが、小学校でいじめにあったり、不登校になったりと、つらい思いをしているときに、何もできないというもどかしさを感じたことから始めた事業です。子どもたちが放課後、

気軽に立ち寄れて、学校の先生や家庭で話づらいことを打ち明けられる「第三の大人」がいる場所を作ろうと考えたものです。駄菓子を買いに來るついでに、ちょっと悩みを相談したり、「○○ちゃん、最近あんまり學校に來てないんだよ」などと支援のきっかけになる情報を得たりできる場になっています。

そして、駄菓子屋さんをやっている、家庭環境に問題がある子ども、保護者が遅くまで働いていて、家で一人で留守番をしている子どもがいることがわかることもあります。そうした状況に対して自分たちでも何かできないかと考えて始めたのが、子どもむら寺子屋はうす「はぴちる」の宿題カフェです。子どもが一人でも安心して利用でき、ほかの子どもと時間を共有したり、勉強を教えてもらって基礎学力を身に付けたりできる場所です。保護者が勉強をみられない、経済的な理由で塾に行けない、といった子どもも利用できます。先生は教育委員会を通して、退職された先生を紹介してもらっています。

保護者のための公園と「コインランドリー」、近隣の高校との連携

伊坂地区は非常に公園が少ない地域なので、子育て公園「あそびの森」は、子どもと安心して遊べて、保護者がリラククスできる場所をと設置しました。

また、ちよつと面白い取り組みとしては、これからコインランドリーを始める予定です。登園する前に保護者の方が寄って、洗濯をしている間に、子どもを預け、園でちよつとおしゃべりしていたら洗濯物が乾いていると、家事のストレスも軽減します。コインランドリーには、靴が洗える洗濯機も多めに置く予定です。泥だらけの子どもの靴を洗うのは大変ですから。

また、園のすぐ裏にある県立高校との連携もおこなっています。水害を想定した避難訓練では、高校の屋上に避難する練習をしたり、運動会の際には、グラウンドをお借りしたりもしています。ハロウィーンの時には、高校に通う生徒さんたちが仮装してイベントに参加しました。この高校で保育を専攻する生徒さんが、コロナの前まで

は年10回程度保育実習に来ていました。また、園の保育者がこうした生徒さんに向けて講義をしたりもしています。能力があり勉強熱心な生徒さんに向けては、園として独自の奨学金制度も設けています。高校卒業後、日中、園でアルバイトをしながら夜間は学校に通って資格を取り、園に保育者として入職してくれた生徒さんもいます。

このように、こどもむらでは、認定こども園を中心に、産前・産後から、乳幼児、小・中・高校まで、学校機能や児童福祉機能、地域支援機能をまたいで、子どもや保護者を地域全体で切れ目なく支える街づくりを目指しています。

大切な先生たちに、「この場所っていいな」と思ってもらえるように

こどもむらの学園理念は「ここにいていいね、いっしょにいていいね」です。かかわる人や地域、園児、保護者、先生に「この場所っていいよね」と思ってもらえるような学園にしていきたいと考えています。

ただ、子育て支援機能を強化し、地域との連携を強めて事業の範囲を幼稚園・保育園という施設から広げていくと、それだけやることが増え、先生たちの負担は増えてしまいます。

すべての核となるのは先生ですから、先生たちを大事にしなくてはなりません。

それには、いかに事業における事務作業などの業務負担を減らしながら、先生たちがより楽しく、発展的に考え、保育の質を上げるにはどうしたらいいか、自発的に考えてもらえる環境をつくるか、です。それが今の私の役割だと思っています。

